

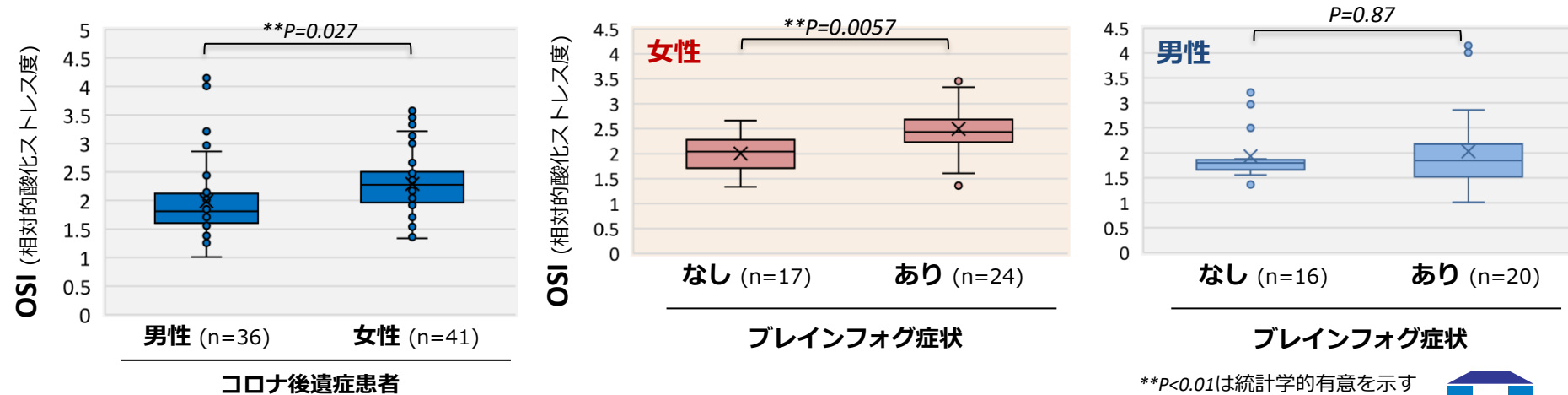
酸化ストレスマーカーによるコロナ後遺症診断における有用性

研究の背景：コロナ後遺症は、新型コロナ感染者の一部に生じますが、その発生機序の詳細は未解決であり、自覚症状が主体となるため、後遺症の存在や重症度を客観的に評価するための指標（バイオマーカー）の開発が求められています。今回我々は、**疲労のマーカーとして報告されている酸化ストレスマーカー**に着目して、コロナ後遺症における臨床的有用性を検討しました。

対象・方法：2024年5月～11月に当院コロナ・アフターケア外来を受診された**オミクロン株期の感染による後遺症患者** 77名（女性41名・男性36名：中央値44歳）を対象に、**疲労との関連が知られている酸化ストレスマーカーとして、血清d-ROM（酸化ストレスの値）・BAP（抗酸化力の値）を測定、OSI（相対的酸化ストレス度）を算出**（山口大：野島研究室との共同研究）。

主な結果：

1. 酸化ストレスマーカー（d-ROM・BAP・OSI）から、後遺症患者で酸化ストレスが大きく抗酸化力が弱いと判明しました。
2. 女性は男性よりも酸化ストレスが高く、年齢・肥満の程度、一部の炎症マーカーと相関する変化を認めました。
3. 内分泌データにおいては、酸化ストレスは甲状腺ホルモンと負の相関・副腎皮質ホルモンと正の相関を呈しました。
4. 後遺症の症状では、ブレインフォグのある場合に酸化ストレスが高く、とくに女性で顕著に差が見られました（下の図）。



コロナ罹患後症状のうち、ブレインフォグ症状の評価に酸化ストレスマーカーは有用である